

松 山 大 学 論 集
第 29 卷 第 6 号 抜 刷
2 0 1 8 年 2 月 発 行

松山大学 1 年次向け初習韓国語カリキュラムに 沿った共通教材開発のための基礎研究

金
金

菊
昌

熙
九

報告書

松山大学 1 年次向け初習韓国語¹⁾ カリキュラムに 沿った共通教材開発のための基礎研究

金 菊 熙
金 昌 九

1. は じ め に

本報告書は、松山大学の教育理念及び教育目標に最も適した韓国語基礎科目（韓国語 1・韓国語 2）の共通教材開発のために必要な内容を先行研究及び韓国語能力試験の評価基準を中心にまとめたものである。以下、本書の構成として、まず言語文化科目の初習言語共通カリキュラムの内容を概観する。その上で、現行カリキュラムの施行前後における韓国語の教育体制を概観する。その際、本学の韓国語履修者向けの共通教材開発を課題として取り上げ、教材開発の意義やその教材のあり方について先行研究の見解をまとめる。さらに、共通教材の具体的な内容構成のための参考資料として、2014 年度から全面的に新しい体制に変わった韓国語能力試験（TOPIK：Test of Proficiency in Korean）の評価基準や評価内容をまとめる。

2. 現行の「韓国語」カリキュラムと教育状況

言語文化部会では、2010 年度のカリキュラムポリシーの策定、2011 年度の

1) 本学の学則変更に伴い、2018 年 4 月より言語の名称が従来の「ハングル」から「韓国語」に変わることを受け「韓国語」に統一している。

カリキュラム改編を経て、2012年度より新しい教育目標と教育内容による現行カリキュラムが施行されている。言語文化科目全体の教育目標は、以下のようである。

○教育目標（カリキュラムポリシーより）

「国際社会で通用する人材の育成」を基本理念とし、その2本の柱として、「実践的言語運用能力」と「異文化理解を通しての多角的な視点」を身につけることを目的とする。

ここでは、言語文化科目のうち英語以外の5つの初習言語に共通する教育目標と教育内容を概観する。

2-1. 言語文化科目の初習言語共通カリキュラム

初習言語の教育目的・目標及び教育内容、さらにはその検証方法に関しては、金（2014）でも取り上げているため、ここでは詳述を避け、5つの教育目的と3つの教育内容を箇条書きでのみ示すことにする。

○教育目的

1. 初習言語へ持続的な興味を持ち、自主的な学習態度を養うための土台を作る。
2. 日常生活と一般的な話題に関してコミュニケーションが行える基本能力を育てる。
3. ヨーロッパないし東アジア圏の多様な情報を理解し、それを活用できる能力を培う。
4. 相互文化理解を深めるため、初習言語学習を通じて日本との慣習や文化の違いを理解する。
5. 外国人に対して自分の意見や意思が相手に伝わるまで、積極的にコミュニ

ケーションに取り組む姿勢を養う。

○教育方法

1. カリキュラム
2. 大学内外でのプログラム・各種留学プログラム
3. 検定試験

付言すると、本学の初習言語教育課程を通して、学生が選択した英語以外の言語について、日常生活と一般的な話題に関してコミュニケーションが行える基礎能力を育てる。そして、その言語によって様々な情報を理解し、活用できる能力を培う。さらには、文化相互主義に基づいて異文化を理解すると同時に、こちらから積極的に日本の文化について発信していく相互文化理解の姿勢を育てる。その結果、本学の初習言語の教育課程を終えてからも、英語以外にもう1つ別の外国語を受容言語として理解する能力を保ち、生涯を通じて自主的に発展し続けていく（またはその姿勢を維持していく）ことを教育目的とする。

そこで、大学在学期間中の限られた履修時間の中で、初習言語として「学べき」で「到達可能なレベル」としての「基礎言語能力」を具体的に記述することが第一に重要な課題となる。次に、教育内容は「コミュニケーション能力の育成」に焦点が置かれているため、教授方法もコミュニケーション・アプローチ中心の授業運営が求められる。さらに、文化の違いによって言語特有の話し方が存在し、会話のスタイルが学習者の母語と異なり得ることを学習過程の中で気づき、その違いを客観的に受け入れられるような教育指導及びさらなる教育の機会が必要である。

以下では、現行カリキュラムが施行される前後の韓国語の教育状況を概観し、現状の問題点及び課題について付け加えたい。

2-2. 現行カリキュラムの施行前後の韓国語教育の状況

現行カリキュラムが適用される前の2011年度までの韓国語基礎科目では、同一科目の授業に対して、授業担当者ごとにそれぞれ異なる教材、授業内容（到達目標）、授業時数、評価基準を持って授業を行っていた。その結果、2年次生向け選択必須の言語文化上級科目²⁾の授業では、本来教育目標とすべき「上級」の内容が年間の授業計画に沿って教えられるのではなく、集まった学生が1年次の基礎科目で何をどこまで学んでいたかを聴取し、大半が未習となっている文法や語彙なりの内容から「上級」の授業が始まるようになっていた。言い換えると、それまでの基礎科目の教育内容に共通の教育目標が存在しなかったために、「上級科目」の教育目標を達成するための教育体制も十分働いていたとは言い難い状況であった。

「韓国語」における教育体制の見直しは現行カリキュラムへの改変作業に合わせて行われることになった。まず、初習言語共通で掲げられた教育目的と教育内容に沿って基礎科目（韓国語1～4）の教育目標を全クラスにおいて統一することになった³⁾。そして基礎科目1・2（1年次向け）と基礎科目3・4（2年次以降）の教材（教科書）は、初級から中級まで教育内容が段階別に刊行されている市販のものから採択することにした⁴⁾。

2012年度以降の新しいカリキュラムの施行に合わせて設けられた韓国語基礎科目1・2の共通シラバスに記載されたそれぞれ半期ごとの到達目標は以下のようなものである。

2) 現行カリキュラムからは、「言語文化応用科目」に名称が変更されている。

3) 但し、基礎科目「韓国語1・2」の再履修クラスに関しては通常のクラスとは別途のシラバスが用いられている。

4) 基礎科目以外に、2年次から選択履修可能な言語文化応用科目には、「コミュニケーション」「リーディング」「ライティング」「キャリアアップ」「ステップアップ」があり、スキル別・能力別に特化された教育内容になっている。応用科目の教材の選定は、基本的に授業担当の教員の裁量に委ねられている。

〈到達目標〉

「韓国語 1」

- (1) 韓国語の文字（ハングル）と音の結びつきを理解し，綴りを見て発音できる。
- (2) 単語や短文を，韓国語の発音特徴（音韻変化）を理解した上で，ゆっくりでありながらも発音することができる。
- (3) 挨拶表現や，自己（家族）紹介，日常でよく用いられる短い決まり文句のような簡単な表現（20 前後）を読んで（意味を）理解できる。
- (4) 場所を尋ねる表現，誕生日，趣味に関するテーマについて，簡単な話を聞いて意味を理解する。そして，一文や二文程度の短い表現を用いて，韓国語で質疑応答ができる。
- (5) 韓国語の基本文型（語順，基本的な文法要素）を理解したうえで日本語に表すことができる。
- (6) 基礎語彙として，韓国語能力試験 1 級（初級）に該当する 350～370 程度の語彙を読んで理解できる。
- (7) 簡単な単語や挨拶表現のような短い決まり文句を韓国語で書くことができる。

「韓国語 2」

- (1) 十分理解可能な程度の発音で単語や語句，短文を自然なスピードで読むことができる。
- (2) 学習内容に提示された短文や短いパラグラフを読んで，意味が理解できる。
- (3) 新たに提示された文型を学習した後，文型の特徴を日本語で説明することができる。また，異なる文型に応じてその違いを理解し，文の意味を適切な日本語で表すことができる。
- (4) 食べ物を注文する／週末の出来事を話す／約束・提案をする／交通手段を

利用する／買い物をする／電話を掛ける・電話に出る、といった各場面に応じて、話題ごとの短い会話を聞いて理解することができる。

- (5) 上記(4)のトピックについて、会話の内容について簡単な質疑応答ができる。
- (6) 上記(5)のトピックに関連して、3～5文程度の長さで作文ができる。
- (7) 新出語彙として、韓国語能力試験初級（1級）に該当する400前後の単語を学習し、文脈の中で単語の意味を適切に理解できる。

現行カリキュラムの施行初年度末に実施された初習言語科目自己点検の報告会では、当該年度の韓国語の教育内容について現況報告をすると共に今後の課題としていくつかの問題点を取り上げた。そして、その中でも重要かつ優先して取り組むべき課題として、上で述べた教育目標の達成に向け、本学の学生に特化した韓国語基礎科目の教授・学習資料としての共通教材の開発が挙げられている。

3. 共通教材開発の意義及び考慮すべき点

ここではまず各教育機関の教育理念及び教育目標に沿った独自の教材開発の意義について簡単に触れたい。続いて、本学の初習言語基礎科目（韓国語1・2）の共通教材開発の際に考慮すべき点を、特に初級レベルの教材開発に関わる先行研究を中心にまとめたい。

3-1. 教材開発の意義

韓国語教育学事典（2014：892）に提示された「教材」の定義は次のようである。

「教育目的及び目標を達成するために教育課程を反映した教育内容を教師と学習者に提供する総体的なツール」「教育目標を効果的に達成するために教授－学習過程で用いられる資料で、教育課程に含まれた教育内容を教育哲学と共

に提供する物理的実体を指すもの」「教育を『誰が誰に何を教える行為』と見 なす際に『何』に含まれる総体物」

そして教材の機能としては、教育目標の提示、教育課程の具現、学習動機の誘発、教授内容をはじめ標準となる言語・教授法・教授資料・学習内容と学習方法の提供、教授内容の一貫性の確保、評価の対策資料、練習による定着機能の遂行、授業レベルの一貫性の確保などが挙げられる（韓国語教育学事典，2014：893）。

上記の教材の定義と機能を踏まえた上で、教育機関にとって最も望ましい教材のあり方とはどのようなものであるのか。本学の韓国語教育においては「教科書」を主な教授・学習の資料（教材）として用い、大概教科書に描かれている内容の順にしたがって授業を行ってきている。しかし、教科書が韓国で出版されたものであるかそれとも日本で出版されたものであるかによって内容の構成や難易度、分量など様々な点で長短が別れる⁵⁾。韓国語基礎科目においては、2017年度現在に至るまで、複数の市販の教科書を共通教材として用いている。年度によって使用する教科書が変わる場合は、その都度本学の教育環境に合わせて授業計画及び教授・学習内容を調整して授業をしてきた経緯がある。しかし、事前の授業計画と教授・学習内容の調整には限界があり、本学の韓国語カリキュラムと学習者のニーズやレベルに適合した教材を選ぶことは決して容易なことではない。結局のところ、教科書が変わることには試行錯誤も付くと共に、頻繁に変わる場合はそれに対応する授業担当者の負担も加重していくことになる。今後の韓国語教育体制の安定化を図るためにも、共通教材の開発問題は看過できない当面の重要課題であるといえる。

次節では、初級韓国語の教材開発を進める上で先決すべき条件について考える。その後、初級教材の主な構成内容としての語彙と文法項目の選定に関わる

5) 一例として、日本と韓国で出版された複数の初級韓国語教材に提示された語彙を比較した先行研究では、分析対象となった教材ごとに提示されている語数が多様である上、教材間にも大きなばらつきが見られることが指摘されている（cf. 金昌九・金菊熙，2014）。

先行研究を概観する。

3-2. 初級教材の開発に関わる先行研究の概観

教材開発の準備段階ともなる前提事項としては、大きく個別教育機関の環境と教材内容の構成の2つに分けて考えることができる。まず1つ目の教育機関の環境については、各教育機関が持つ教育目的・目標およびカリキュラムの特性といったものが挙げられる。本学の言語文化科目のカリキュラムポリシーおよび初習言語の共通カリキュラムについては前項で述べたとおりである。これ以外にも、本学の韓国語履修者の学習動機や先行学習経験の有無、学習レベルおよび効果などに関する理解が求められる。しかし、この点についても本学の韓国語学習者の年齢、母語、外国語学習経験、そして学習時間等に関してはある程度一定の類型を示すことができる。さらに学習目的及び動機付け、学習態度、韓国文化への興味・関心といった学習者の内的要因に関わる点に関しても、十分とは言えないが、既に本学の韓国語学習者を対象に行われた調査の結果を参照することができる⁶⁾。

これらの学習者要因をしっかりと捉えた上で、本学の教育理念と教育課程に最も適した教育内容を具体的かつ体系的に構築していくことが2つ目の前提条件になる。その際、韓国語の基礎段階で扱うべき文字・発音・決まり文句（定型表現）・基礎会話・語彙・文法に関わる教授・学習内容を選定し、初級レベルの教材として内容を構成することになる。その中でも重点が置かれるものとして、教授・学習内容として学習者に段階別に提示される語彙の範囲と文法項目の選定が挙げられる。以下では、初級レベルの韓国語教材の開発動向を概観し、その上「語彙」や「文法項目」に関わる先行研究をまとめる。

近年韓国国内で刊行されている初級韓国語教材の傾向は「統合型」という言葉で表される。「韓国語教育学辞典（2014）」によると、統合型教材は、韓国語

6) cf. 金菊熙（2014）「初級言語教育における相互文化理解の授業のあり方を考える－松山大学の初習言語「ハングル」における授業例を中心に－」

のコミュニケーション中心教育が安定化された1998年に登場したもので、言語要素とスキルを別物として区分するのではなく、「文法と語彙」「聞く」「話す」「読む」「書く」を統合して教材の内容を構成したものである。

パク・ヘギョン(2008)は、韓国語教育の基礎段階では、ほとんどの教育機関で文字の教育を中心に行っているという⁷⁾。基礎段階は初級に入る前に知っておくべき基本的内容を習得する段階ではあるが、文字教育だけに限定する場合、学習者の立場からは、ハングル(文字)を学習する間は韓国語を話して聞く機会がないといった短所があると指摘する。文字を完璧にマスターしてから音声言語を発話できるわけではないので簡単な挨拶表現や自己紹介に必要な表現を文字の学習段階に取り入れることで、韓国語に初めて接する学習者の動機と興味を引き出す効果があるとしている。

上記に関連してアン・ヨンス(2008)では、韓国以外の国で韓国語を第2言語として学ぶ多くの学習者は、韓国語学習に対するはっきりとした目標や関心があるというより、むしろ好奇心と周囲の環境的要因が学習動機になることが多いと述べている。そのような学習者のほとんどは韓国語と韓国文化に初めて接することになるため、「興味」と「話す」ことに重点を置くことが望ましいとし、学習初期の段階では、発音規則を知るよりは基礎的な語彙や短い文を用いた反復練習を通して音の変化を自然に学ぶことに重点を置くべきであると指摘している。

続いてチョ・ヒョンヨン(2008)は、韓国で出版された韓国語教材の教授要目に着目し、教材間の比較・検討を行った。その結果、それまでに開発された韓国語教材の教授要目は習熟度別の教育内容が統一されていないことを問題点

7) このような主張は日本国内における韓国語教育機関では現状でもある程度当てはまる話であるが、韓国国内においては必ずしもそうではないとも言える。

近年刊行された韓国語の教材において基礎段階は2つのパターンに分かれる。1つ目は、基礎段階を非常に簡素化して扱うか省略する場合である。2つ目は、既存の定型化された枠(文字を辞書順に提示し、単純な発音練習のための語彙を提示するといった構成)から離れ、初級段階以前の準備学習、先行学習としての意味のある内容で構成される場合である(パク, 2008: 317)。

として指摘している。そしてその解決案の1つとして、文法に関しては、韓国語能力試験の評価基準を文法項目の選定時に活用することを提案している。その理由として、韓国語能力試験の場合、多数の韓国語教育機関の専門家が出題と検討、採点委員として参加しているために、専門家の意見が最も集結された資料としてみなすことができるとしている。さらに、近年の教材開発の方向が統合型教材を志向していることを受け、韓国語教材を開発する上で主な要素である語彙や文法項目と共に、シチュエーション・トピック・状況・機能・構造(文法)をまとめた総合的な教授要目⁸⁾が欠かせないと主張する。

ホン・ユンギ(2008)では、韓国で市販されている韓国語の教材4種23冊の中から文法項目をまとめ、それを基に表現項目⁹⁾と文型¹⁰⁾を、先行要素の形態的な特徴を基準に分類した。その中で、韓国語を教育の対象にしているにも関わらず各機関の教材に現れた表現項目の一覧および類型は統一されていないと指摘する。さらに、学習者の習熟度別に提示される表現項目もまた異なっていることが分かった。これについてホンは、教育機関によって教育目標と教育方法が異なることが1つの理由として考えられるが、その他に教材作りを理論的にバックアップする教育原理が異なっていることも考えられるとしている。

韓国語の文法教育の特性を考慮すると、表現項目を効果的に設定して類型化することは非常に大事な作業になる。また、表現項目をコミュニケーション上の機能を基に再分類し、学習者の言語能力に従って再配列して教材に反映することは韓国語の文法教育の効率性を高める方法にも繋がる。教材ごとに異なる基準で提示された表現項目を韓国語能力試験などのような信頼性の高い試験の

8) 概念・機能シラバス (Notional/Functional Syllabus) のこと。チョ(2008)では7つの教育機関の初級教材に提示されている「機能」を比較分析している。

9) 表現項目 (expression entries) は、名詞／動詞／形容詞などの語彙要素と助詞・語尾接続などの文法要素が結合して意味／統合的に1つの機能を持つ。そして、初級の段階では34個程度の比較の数少ない表現項目が提示されている (ホン, 2008: 108)。

10) 文型 (sentence pattern) は、文法要素と文法要素、文法要素と表現項目が対応して出来上がったほぼ完全な文の型である (ホン, 2008: 108)。

評価基準に合わせ、各レベルに相応しいものに分類することも必要である（ホン、2008：112）。

ヤン・ジェスン（2017）では、韓国語の統合型教材の文法記述に関連して、文法事項を説明するための例文を作成する際に考慮すべき点について考察を行った。統合型教材の場合、文法の説明が簡略に記述されることが多く、不十分な文法事項に関する説明は例文を通して補わなければならない。そこで文法事項を説明するために考慮すべき例文作成における5つの原則を要約すると以下のようである¹¹⁾

- (1) 例文は記述された意味説明に適合するもので文法項目が持つ意味を明らかに示さなければならない。
- (2) 学習者が目標文法項目に集中できるように例文の難易度を調整しなければならない。
- (3) 文脈を持った談話の形式で例文を提示しなければならない。しかし、教材が持つ紙面上の制約を勘案すると、会話のやり取りを例文として提示することには限界がある。特に初級の教材の場合、学習の負担を考慮して会話文ではなく一文単位の例文が提示されることが多い。
- (4) 例文には様々な形態及び統語の情報が提供されなければならない。
- (5) 単元の目標に関連した例文を含めなければならない。

そしてまた何より大事なのは、これらの原則の下、文法事項の説明に用いられる例文の提示様式は教材全体を通して体系的に統一して表すことであるとヤンは述べている。

キム・ヨンラン（2011）によると、韓国語教育における学習語彙の選別作業は「韓国語世界化推進委員会」を中心に始まり、ソ・サンギュ（1998, 2000, 2001, 2002）を初めとする一連の研究成果は、2006年度に「外国人のための韓国語学習辞典」として刊行されている。一方、国立国語院でも韓国語学習用

11) cf. ヤン（2017：201-206）

の語彙リストを集めて頻度調査を実施し、その結果として韓国語の学習語彙 6,000 個余りが選定されている（チョ・ナムホ，2003）。なお、その 6,000 個のうち、韓国語学習の第 1 段階（初級）では 982 個の語彙が選定されている。

ウォン・ミジン（2011）は、韓国語学習者の習熟度によってどの程度の基本語彙を学習すべきであるかについて考察を行った。その中で、語彙力に関する 2 つの基本的な問題¹²⁾を取り上げた上、初級段階の学習すべき語彙数について 724 個～1,845 個までの幅広い研究結果を紹介している。そしてさらに、語彙の性格によって「表現（算出）語彙」であるか「理解（受容）語彙」であるかによって語彙数が異なってくる問題や、言語学習者がどれほど多くの語彙をどのような方法で学ぶことができるのかという問題についてもさらなる議論が求められると述べている。

カン・ヒョンファ（2014）は、韓国国内の教育機関によって刊行された韓国語教材 5 種 66 冊に出てくる語彙量と韓国語能力試験の語彙量を比較し、両者間で習熟度別の語彙量の違いを調べた。両者を比較することで、教材と教育課程、そして評価（韓国語能力試験）間で用いられる語彙の違いを把握することができる。そして、習熟度別の語彙選定の研究は、限りのある教育時間の中で、学習する語彙を無限に広げず、教育目標や教授要目に連携した語彙だけに限定できるメリットがある。

各教育機関の教材を比較分析した結果、習熟度別の語彙数は大きく異なっていた。これはつまり、どの教材で学習をするかによって学習する語彙量と語彙の属性が異なってくることを意味する。また、教材の語彙量と韓国語能力試験の語彙量も習熟度別に異なっていることが分かった。但し、韓国語能力試験の初級だけに限ると、習熟度別の語彙量は一定して保たれているといえる（カン，2014：58）。

12) どれほどの語彙を知るべきかという語彙量または語彙数（vocabulary size）の問題と、それをどの程度まで知るべきかという語彙知識の深さ（vocabulary depth）の問題である（ウォン，2011：259）。

ソ・サンギョ (2014) は、「韓国語基本語彙研究 (2013)」と「韓国語基本語彙意味頻度事典 (2014)」で発表された「韓国語基本語彙 (2,962 個の実質語彙)」を検証する目的で、上記の2つの先行研究で得られた基本語彙と韓国語の教育現場で学習されている教育語彙の一覧を比較し、「基本語彙」がどれだけ妥当であるかを検証した¹³⁾。その結果、基本語彙2,962 個中の702 個が韓国語能力試験 (初級) 1 級の単語963 個と一致することが分かった。このことから「1 級の単語」と一致する基本語彙が非常に頻度の高い言葉で構成されていることや、「1 級の単語」が語彙数としては少ないが、それを学習することだけで理解できる範囲がかなり広まるといった意味としても捉えられるという。

カン・ヒョンファ (2015) では、語彙リストの選定において考慮すべき点について、まず、語彙を数える単位を「単語」にするか、それとも「単語族 (word family)」にするかに加え、機能語をどれほど含むかなどによって全体の語彙量は大きく異なってくるとしている¹⁴⁾。そして、語彙の出現頻度や範囲といった客観的な指標にどれほどの比重を置くべきかについても考慮すべきであると述べている。その理由として、韓国語の教育資料として用いられる言葉のデータ資料がまだ小規模なものである上、さらに教材開発者の経験に大きく頼る形で集められた場合、客観的妥当性を確保することは容易ではないという。

ここまで初級の教材を開発する際に考慮すべき点について、主に文法と語彙

13) ソ (2014) は、基本語彙の選定方法に関する先行研究を大きく以下の5つに分けて提示した。

- (1) 現場の経験等を活用した主観的選定
- (2) 既存の一覧と比較しながら語彙の一部を補充
- (3) 既存の計量的情報を基にしながら主観的な語彙選定を併用
- (4) 言語データからの語彙頻度情報を基に、専門家の主観的評定の活用
- (5) 言語データなどの語彙頻度情報ははじめとする様々な計量的情報を積極的に活用して選定

その上で、上記(1)に近いほど主観的な選定基準の特性が強くなり、(5)に近いほど主観性を排除した客観的な選定方法を考案しようとしたものであるとしている。

14) しかし、カン (2015: 13) でも言及されているように、一般的に初級レベルで提示される語彙は、基礎レベルの語彙の中でも名詞・動詞・形容詞などといったいわゆる主要品詞に当たるものが大半で、単一語で構成されていることが多い。

を中心に先行研究をまとめてみたが、その多くにおいて「韓国語能力試験」の評価基準を教材開発に活用する提案が行われていることが分かった。これを踏まえ、以下では、韓国語能力試験初級レベルの評価基準について詳細をまとめ、今後の初級教材の開発の際の参考資料として活用したい。

4. 韓国語能力試験初級（1級・2級）の評価基準

ここではまず韓国語能力試験の実施背景や目的及び現在に至るまでの試験体制の変化を概観し、韓国語教育分野における役割や影響についても簡単に触れることにする。そして、韓国語能力試験が提示している習熟度別の評価基準を、公開資料などを基に、主に初級レベルを中心に詳述したい。

4-1. 韓国語能力試験の施行背景と現状での試験問題出題体制

韓国語能力試験は1997年10月に第1回目の試験が実施されて以来、約20年に渡って韓国語の習熟度の測定という評価の機能のみならず、韓国語の教授・学習の方向をも提示し、韓国語教育課程の設計における参照基準としても用いられるなど、まさに韓国語教育課程の設計から教育の実行、評価に至る全過程において重要な役割を果たし、韓国語教育に寄与している（キム・ジョンスク，2017）。

韓国語能力試験が施行された当初から15年間この試験を主催してきた韓国教育課程評価院によってまとめられた『韓国語能力試験15年史』では、韓国語能力試験の性格を以下のように記している¹⁵⁾

韓国語能力試験は、韓国語を母語としない外国人または韓国以外の国で暮ら

15) 2011年度からは、韓国語能力試験の主催機関が韓国教育課程評価院から国立国際教育院に変更されている。なお、第1回目の試験は、韓国と日本を含む計4カ国で行われたが、2017年1月1日基準では、韓国を除く計73カ国、217の地域で施行されるまでに拡大している。

す韓国にルーツを持つ人々に韓国語の学習方向を提示し世界中に韓国語の普及を拡大するために施行されるものである。この試験を通して、学習者自身の韓国語の使用能力を測定し、韓国語の習熟度を図ることができる。言い換えると、本試験は、学習者の「韓国語の習熟度 (proficiency in Korean)」を評価するために開発され、日常的な目的またはある特定の目的を果たすために第2言語あるいは外国語として韓国語を用いる者の駆使能力やスキルを評価するために開発されたものである。しかし、この試験で測定しようとする韓国語能力は単に「聞く」「話す」「読む」「書く」といった個別的な能力ではなく、言語の使用を通して総合的に表される能力である。韓国語能力試験の評価基準もまたこれに基づいて設定されている。

韓国語能力試験が提示する評価の方向性は次の4項目に集約できる¹⁶⁾

- (1) 韓国語を母語としない学習者に韓国語の学習方向を提示する。
- (2) 韓国語教育において国家公認の評価の基準を提案する。
- (3) 韓国内外の様々な形態の韓国語教育機関に対してスタンダードとなる韓国語の教育課程及び教育評価方法を提示する。
- (4) 公認された評価を通して韓国語能力に対する客観的な指標を提供する。

韓国語能力試験という評価ツールが開発された当初の目的は、韓国語の学習者に客観的な評価の指標を提供し、正しい学習方向を提供するためであった。言い換えると、韓国語能力試験そのものが、韓国語の学習者が自ら韓国語学習の方向と目的を設定し、韓国語を継続して学習するための動機に繋がる上、自らの学習目的を明確にできることで確実な目標に向けた学習方向を提供しているといえる。

なお、学習者の韓国語の習熟度を評価する標準化された評価ツールとしての

16) 詳しくは『韓国語能力試験15年史(2010:4-5)』を参照されたい。ここでは、韓国語(能力)の評価及び韓国語教育における評価の分野に関連した記述内容の概要だけを引用・紹介する。

役割に止まらず、韓国内外の韓国語教育現場における教育内容の標準化にも貢献している。これまでに、それぞれの教育機関別に設けられていた韓国語の教授内容及び方法等が韓国語能力試験という客観的な基準の下である程度標準化された教育課程の策定や教授活動の改善などに繋がり、韓国語教育分野全般にわたって肯定的な影響を及ぼしていると評価できる。

さらに、韓国語能力試験の習熟度別の合格証明書は、韓国語学習者にとって自分の韓国語能力を正確に知ることのできる公認された資料である。そして、大学及び大学院への進学または韓国企業への就職を希望する者にとっても出願資格の1つとして用いられている。

韓国語能力試験の実施当初から第34回目の試験までは「語彙・文法」「書く」「聞く」「読む」の4項目が評価されていた。しかし、2014年の第35回目の試験からは、韓国語能力試験Ⅰ初級（1級・2級）では「聞く」と「読む」の領域のみを、韓国語能力試験Ⅱ（中級・高級）では「聞く」「書く」「読む」の3領域の評価に変わっている¹⁷⁾。

4-2. 韓国語能力試験の評価基準及び内容

習熟度の評価は、学習者の言語能力全般にわたる言語コミュニケーション能力の程度を測るもので、一般的には言語の4技能とあらゆる言語使用場面での全体的な言語使用能力を含むものである¹⁸⁾。

以下の「表1」は、現行の韓国語能力試験における習熟度別の評価基準を、韓国語能力試験Ⅰ（初級）と韓国語能力試験Ⅱ（中級・高級）に分けて段階別（第1級～第6級）に表している。

17) 現行の評価体制は本来習熟度を測るために設けられた試験としての役割を十分果たしていないという点で、一部の研究者から問題提起されている（cf. キム, 2017）。しかし、初級レベルの学習者（特に韓国以外の地域で韓国語を学習している者）に限っては、「聞く」「読む」の受容（理解）能力の評価に縮小したことで、試験そのものに対する学習者の負担を軽減できると共に、次の中・上級レベルに向けて学習動機を持続させられるという点を勘案すると、一定の効果は出していると考えられる。

18) 『韓国語教育学事典（2014）』での定義を参照、要約

表1 習熟度別の評価基準¹⁹⁾

レ ベ ル		評 価 基 準
TOPIK I	1 級	自己紹介, 買い物, 飲食店での注文など生活に必要な基礎的な言語を駆使でき, 身近な話題の内容を理解・表現できる。800語程度の基礎的な語彙と基本文法を理解でき, 簡単な文章を作れる。
	2 級	電話やお願い程度の日常生活に必要な言語や, 郵便局, 銀行などの公共機関での会話ができる。1,500~2,000語程度の語彙を用いた文章を理解でき, 使用できる。
TOPIK II	3 級	日常生活を問題なく過ごせ, 様々な公共施設の利用や社会的関係を維持するための言語使用が可能。文語と口語の基本的な特性を区分して理解・使用することが可能。
	4 級	ニュースや新聞をある程度理解でき, 一般業務に必要な言語が使用可能。よく使われる慣用句や代表的な韓国文化に対する理解を基に, 社会・文化的な内容の文章を理解でき, 使用可能。
	5 級	専門分野においての研究や業務に必要な言語をある程度理解でき, 使用可能。
	6 級	政治・経済など全般的なテーマにおいて不便なく利用可能。ネイティブ程度までではないが自己表現に問題なく話す事が可能。

続く「表2」から「表5」は, キム・ワンギュ他(2001)で提示されたレベル別のトピック, 機能, 言語(語彙・文法), 文章の類型の中から初級の部分のみ抜粋したものである²⁰⁾

表2 初級(1級・2級)の評価内容トピック(素材)

レ ベ ル		評 価 内 容
TOPIK I	1 級	紹介, 日常生活, 学校生活, 場所, 買い物, 食べ物, 季節と天気, 交通手段, 品物, 位置, 時間, 趣味, 交通, 運動, 家族, 約束
	2 級	週末, 位置, 天気, 約束, 運動, 学校生活, 事務室, 家, 電話, 品物, 場所, 方向, 時間, 位置, 食べ物, 交通, 身体, 家族, 職業, 買い物, 手紙, 服, 郵便局, 銀行, 病院, 旅行, 計画, 感情, 挨拶, 理由, 計算, 映画, 約束, 日課

上表2で示されたように, 初級で扱われるトピックは, 日常生活や食べ物, 交通などといった日常の言語使用の場面で頻繁に取り上げられ, 非常に個人的で親しみのあるもので構成されていることが分かる。

19) 韓国語能力試験(日本サイト) <https://www.kref.or.jp/examination/topik> より抜粋

20) ここで提示する「表2」から「表5」の内容は「韓国語能力試験15年次」の69-73ページに収録された内容を著者が任意にアレンジ(和訳)して再引用したものである。

続いて「表3」にまとめられた初級レベルにおける評価内容は、日常生活の基本的なコミュニケーションをする上で頻繁に使用する「紹介」「買い物」「要請」などを主な機能として扱う。

表3 初級（1級・2級）の評価内容－伝達機能面

レ ベ ル		評 価 内 容
TOPIK I	1 級	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な音韻の識別 ・基礎的な文を理解し、構成する ・簡単な会話やストーリーを理解して生成する ・簡単な実用文を理解して生成する ・自己紹介、挨拶、買い物、注文する、位置表現、時間表現、日常生活の表現、交通手段の理解、要請する、命令する
	2 級	<ul style="list-style-type: none"> ・区別しにくい音韻及び音韻の変化を識別する ・簡単な文を理解して識別する ・日常生活に関連した会話を理解して生成する ・簡単な実用文と生活文を理解して生成する ・聞いて答える、説明する、比較する、提案する、要請する、同意する、断る、許可する、推測して表現する、メモをとる

以下の「表4」に示された語彙・文法の範疇は、前項の「表2」で提示されたトピック（素材）及び以降に続く「表5」の文章の類型とも関連される。それは、文章のジャンルによって用いられる語彙及び文法の表現が異なってくるからである。

表4 初級（1級・2級）の評価内容－意味（語彙）・文法

レ ベ ル		評 価 内 容
TOPIK I	1 級	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活に必要な基礎的な語彙 ・個人的で親しまれている素材と関連する最も基礎的な語彙 ・基礎的な人称及び指示代名詞、疑問代名詞 ・周辺の物の名称、位置関連語彙 ・数に関連した語彙 ・「大きい」「小さい」などのような基礎的な形容詞 ・「行く」「来る」などのような基礎的な動詞 ・買い物をし、食べ物を注文するなどの日常生活に関連した基礎語彙 ・主語－目的語－叙述語の順に沿った基礎的な文構造 ・叙述文、疑問文、勧誘文、命令文などの文の類型 ・誰・いつ・どこ・何・なぜなどで構成された疑問文 ・「그리고 (そして)」「그러나 (しかし)」などのように頻繁に用いられる接続詞 ・「-이/가 (が), -은/는 (は), -을/를 (を), -에 (に)」などの基礎的な助詞 ・「-고 (～で, で), -어서 (～ので), -지만 (～けれど)」などの基礎的な表現

	1 級	<ul style="list-style-type: none"> ・時を表す基礎表現 (テンス) ・「안」 と 「-지 않다 (～ではない)」 で表す否定文 ・「으/로/ㄴ」 変則動詞
	2 級	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活で頻繁に用いられる語彙 ・公共施設を利用するときに頻繁に用いる基本語彙 ・「済州島・民俗村」など頻繁に接する固有名詞 ・「きれいだ・静かだ・複雑だ」など周辺の状況を示す形容詞 ・「出発する・直す」など、日常生活で頻繁に用いる動詞 ・郵便局の利用, 会議など公的な状況に関連した基本語彙 ・約束, 計画, 旅行, 健康に関連した語彙 ・「자주 (よく)・가끔 (たまに)・ 거의 (ほとんど)」など基本的な頻度副詞 ・「-보다 (～より), -이나 (～か), -밖에 (～しか)」など比較的に頻繁に用いられる助詞 ・「-을까요 (～しましょうか), -을 거예요 (～するでしょう)」など頻繁に用いられる終結形 ・「-고 있다 (～している), -어 있다 (～ている), -어 주다 (～してあげる), -어 보다 (～してみる)」などの基本的な補助表現 ・「-으면 (～すれば), -는데 (～するの), -으면서 (～しながら)」など、頻繁に用いられる連結表現 ・「르, ㅁ, ㅂ, ㅅ」変則動詞 ・관형사형 (連体形) ・形容詞の副詞形 ・尊敬語の基本的な形態

文章の類型によって扱われるトピックが異なり, 言語の内容と形式が変わってくるため, 言語能力は文章の類型と深く関わる。初級のレベルでは, 日常生活で頻繁に接する実用文が主な文章の類型として用いられる。しかし, 初級の段階では習熟度がまだ浅いということを勘案すると, ここでいう「文章」の意味は, 単語から文章に至るまでの連続線上にあるすべての単位として考えるのが妥当であるといえる。

表 5 初級 (1 級・2 級) の評価内容－文章の類型

等 級		評 価 内 容
TOPIK I	1 級	<ul style="list-style-type: none"> ・短めの標識, 簡単な会話文, 5 つ以内のセンテンスで構成された生活文 ・標識 (語), 広告, 案内文, メモ, 紹介文, 生活文, 手紙文, 日記, 領収書, 名刺
	2 級	<ul style="list-style-type: none"> ・短めの文章, 簡単な会話文, 7 つ前後のセンテンスで構成された実用文 ・標識語, 会話文, 叙述文, 説明文, 実用文, 領収書, メモ, 手紙文, 日記, 書式, 案内文, 広告文

5. ま と め

教育機関によって教育理念や教育時間、そして学習者のニーズなどといった教育環境が異なっているために教育目標及びそれに準ずるシラバスやより詳細な授業計画などは当該教育機関が用いる教材の性格を決める上で重要な要因となる。反対に、教育機関に特化された教材がない場合は、使われる教材によって教育目標の到達範囲や授業内容を調整するか、副教材や別途の資料を用いるなどの工夫が必要になってくる。

そこで本報告書では、本学の教育環境に合う初習言語基礎科目（韓国語 1・2）の共通教材開発の意義を述べた後、初級レベルの教材を開発する上で考慮すべき点として一連の先行研究の結果を概観した。そしてさらに韓国語の習熟度別の評価基準として韓国の政府機関が公認し、世界的にも広く普及されている韓国語能力試験初級（1級・2級）の評価基準を、関係機関の公開資料などを基にその内容を概観した。

以降、本研究を通してまとめられた内容を参考に、本学の教育環境に最も適した韓国語学習者中心の統合型共通教材の作成に向けて研究を継続していきたいと思う。

参 考 資 料

- 金菊熙（2014）「初級言語教育における相互文化理解の授業のあり方を考える－松山大学の初習言語「ハングル」における授業例を中心に－」『松山大学論集』26-1, 131-171.
- 金昌九・金菊熙（2014）「초급 한국어 교재에 제시된 어휘의 목록과 계량적 분석(初級韓国語教材に提示された語彙一覧計量的分析)」『言語文化研究』33-2, 165-188.
- 小池生夫他編著（2003）『応用言語学事典』研究社
- 강원화（2015）「한국어교육용 고급 어휘 선정에 대한 연구」『외국어로서의 한국어교육』42, 1-28.
- （カン・ヒョンファ（2015）「韓国語教育における高級レベルの語彙選定に関する研究」『外国語としての韓国語教育』42, 1-28.）
- 강원화（2014）「국내 한국어교육기관 교재 어휘 분석 연구 1－양적 분석을 중심으로－」『외국어로서의 한국어교육』41, 37-60.

- (カン・ヒョンファ (2014) 「国内の韓国語教育機関で使用されている教材の語彙分析研究 1 –量的分析を中心に–」『外国語としての韓国語教育』 41, 37-60.)
- 김영란 (2011) 『한국어 교육-교재와 연구』 소통
- (김·윤란 (2011) 『韓国語教育-教材と研究』 ソトン)
- 김정숙 (2017) 「한국어능력시험 20년 발전사와 최근 동향 –1997년 제 1 회 시험부터 2016년 제52회 시험까지–」『한국어교육』 28-3, 1-24.
- (김·조ンス (2017) 「韓国語能力試験 20 年の発展史と最近の動向 –1997 年第 1 回目の試験から 2016 年第 52 回目の試験まで–」『韓国語教育』 28-3, 1-24.)
- 박혜경 (2008) 「한국어 교재의 기초단계 구성」『한국어 교재 연구』 하우 p.315-330.
- (박·헤ギョン (2017) 「韓国語教材の基礎段階の構成」『韓国語の教材研究』 하우 p. 315-330.)
- 서상규 (2014) 「한국어 기본어휘의 검증에 관한 일고찰 –연세대 한국어학당〈1 급단어목록〉과의 대조 분석–」『외국어로서의 한국어교육』 40, 141-169.
- (ソ・サンギョ (2014) 「韓国語基本語彙の検証に関する一考察：延世大学校韓国語学堂〈1 級単語リスト〉との対照分析」『外国語としての韓国語教育』 40, 141-169.)
- 서울대학교 국어교육연구소 편저 (2014) 『한국어교육학 사전』 하우
- (ソウル大学校韓国語教育研究所 (2014) 『韓国語教育学事典』 하우)
- 서종학·이미향·박진욱 (2017) 『한국어 교재론』 한국문화사
- (ソ・ジョンハク他 (2017) 『韓国語教材論』 韓国文化社)
- 서종학·이미향 (2007) 『한국어 교재론』 태학사
- (ソ・ジョンハク他 (2007) 『韓国語教材論』 테학사)
- 안영수 (2008) 『한국어 교재 연구』 하우
- (안·윤스他 (2008) 『韓国語教材研究』 하우)
- 양재승 (2017) 「한국어 통합 교재의 문법 예문 작성 원칙 연구」『한국어교육』 28-1, 197-220.
- (얀·제스 (2017) 「韓国語統合教材の文法例文作成の原則研究」『韓国語教育』 28-1, 197-220.)
- 원미진 (2011) 「한국어 어휘 교육 연구의 방향 모색」『한국어교육』 22-2, 255-279.
- (ウォン・ミジン (2011) 「韓国語語彙教育研究方向の模索」『韓国語教育』 22-2, 255-279.)
- 조현용 (2008) 「한국어 교재의 기능 교수요목」『한국어 교재 연구』 하우 p. 40-58.
- (チョ・ヒョンヨン (2008) 「韓国語教材の機能教授要目」『韓国語教材研究』 하우 p. 40-58.)
- 한국교육과정평가원 (2010) 『한국어능력시험15년사』 한국교육과정평가원
- (韓国教育課程評価院 (2010) 『韓国語能力試験 15 年史』 韓国教育課程評価院)
- 홍윤기 (2008) 「한국어 교재의 표현항목 분석」『한국어 교재 연구』 하우 p. 102-125.
- (ホン・ユンギ (2008) 「韓国語教材における表現項目の分析」『韓国語教材研究』 하우 p. 102-125.)

その他の参考サイト

韓国語能力試験（日本サイト）<https://www.kref.or.jp/examination/topik>

한국어능력시험 초급 어휘 및 문법 목록 보고서（2013）<http://www.topik.go.kr>

（韓国語能力試験初級語彙及び文法一覧報告書（2013））

*本報告書は，平成 28 年度に交付を受けた松山大学教育研究助成を基にした成果の一部である。金菊熙は研究の総括及び執筆を担当し，金昌九は「語彙」を中心に資料収集及び調査を担当した。